

竹本駒之助 女流義太夫一代記

その1

義太夫を始めたのは、終戦後、中学に入ってからです。いまは神奈川県民で、四十年近く秦野に住んでいます。出身は兵庫県の淡路島。人形浄瑠璃発祥の地である淡路のなかでも、特に義太夫が盛んな地域でしたが、戦争で衰退しつつあったので、中学の校長先生でいらした不動産（ふどうかなめ）先生が、義太夫クラブを作られたんです。この先生は、「義太夫さえやっていれば、日本国は安泰だ」とおっしゃるくらい、義太夫が大好きな方でした。そのクラブに呼ばれて参りましたのが、義太夫を始めたきっかけです。

ところが私以外に義太夫をやるという生徒はいなくて、クラブには職員室の先生方が見えてました。校長先生が活版で『傾城阿波の鳴門』の本を刷ってくださって、人形の座本の吉田伝次郎さんがお三味線をもつて来てくださり、聞かせてくださいました。

家に帰って母にこの話をしましたら、「お稽古事は最初が肝心。義太夫を教わるなら、人形の方からではなく、太夫か三味線の本職の方からでないといけない」と言われ、「校長先生には悪いけれど、クラブに行くのはやめなさい」と禁じられてしまったんです。そして、ちようど家の裏にいらしたお三味線の鶴澤友路師匠（当時は君香とおっしゃいました）——今年の十二月で満百歳

になられる人間国宝の方です——に連れて行かれ、一ヶ月ほどお稽古することになりました。

そもそも自分から好きで始めたわけではない義太夫ですから、真剣に覚える気もなく、近所のお友達がお稽古を覗きに來るのも恥ずかしくて……。友路師匠がご実家に帰られると聞いて、やれやれこれでやめられると思いましたが、今度は母から、（母のお友達でいらした）竹本島之助師匠のところにいきなさい、と言われ連れて行かれました。覚える気がないのに、一ヶ月のお稽古で自然に耳に入っていたのでしょうか。島之助師匠が「これはいい」と母におっしゃったもので、毎日お稽古に通うことになりました。

ともかく母が義太夫好きで、それに誘導されてお稽古を続けていたようなものです。その頃の私は、どちらかというと歌謡曲好きで、当時流行していた笠置シズ子の歌を口真似して歌っていました。歌手になりかけたのかもしれない。

その後、大阪から女流義太夫の一行がいらしたとき、みなさんをうちにお泊めしたんですね。その時、公演の前座を私がつとめることになり、みなさんが私の義太夫を聴いてくださったんです。そして「この子は天才だ」と言うてくださる方があって、この興行が終

わつたら内弟子にして大阪に連れて帰ろうという話がいつの間にか出来ていた。私は何にも知らなかったんですけど。ただ戦後間もなくで、食べるものも住むところも大変な時代ですから、内弟子にとるといっても、ご家庭のある方はそう簡単にはいきません。そこで、その時お一人でいらした竹本春駒師匠の内弟子にしていたくことになりました。中学三年の終わりです。

当時春駒は六十歳くらいだったと思います。当時の六十歳というのは、今と違って本当に年寄りで、そのお婆さんとたった二人で暮らすことになった私は、心細くて仕方ありませんでした。その頃も熱心なのはまわりで、本人はまだやる気がなく、内弟子がどういうものかもわからず大阪に行っていました。特に辛かったのは、春駒の質素な暮らしぶりです。朝お掃除するのにも、蛇口をじゃーつとひねったらいけない。バケツを持ってお豆腐屋さん

竹本駒之助
女流義太夫一代記



が流す水をもらいにいき、それでお掃除しなきゃいけないんです。私の母が「きちんとご飯を食べさせてください」と月に二、三回お米を持ってくるんですが、春駒は勿体ないと言って水のようなお粥さんしか炊いてくれない。淡路の実家では何不自由なくのんびり暮らしていましたから、私は泣きの涙でした。お稽古も厳しく、怒られることも多くて、毎日「帰りたい、帰りたい」と泣いていました。

今回KAATのチラシに載っている写真はその頃のもので、淡路での私の襲名披露公演です。私の隣でお三味線を弾かれているのが、当時日本一の女流の三味線弾きだった豊澤仙平（とよざわせんぺい）さん。淡路に大阪から

いらした女流義太夫の一行のなかにいらした方です。襲名披露のときは、母が一所懸命運動してみなさんに後援会を作っていたとき、お座布団やらなにやらいっぱい作って準備してくれました。この花に囲まれて飾られているのはお座布団なんです。実家の五三の桐の紋と駒之助の名前を入れて作ってもらいました。

「駒之助」という名前は、春駒師匠から「駒」を、島之助師匠から「之助」をいただいたものです。義太夫はそもそも人の名前（竹本義太夫）で、大夫の名前はだいたい男性のものにできています。女流だからといって、特に女の名前にすることはありませんね。

演目もそうで、「女流の演目」というのは特にありません。できるだけ無理のないように、女が主のものをやるようにはしていますが、そればかりやっていくわけにはいきませんから。一人で語りますから、女も男も、お坊さんも盗人も、お年寄りも子どもも……いろんな役をやります。

話を春駒のもとでの修行に戻しますと、あんまりにも私が「帰りたい、帰りたい」と言ったためか、母が春駒に外にお稽古に出して下さるようお願いをして、男の（文楽の）お師匠さんのところに連れて行って下さいました。その方が十代豊竹若大夫師匠。今回

KAATで語らせていただく「市若丸初陣の段」は、六十年ほど前に大阪で若大夫師匠が語られました。目の不自由なお方で、そのときは毎日私が手を引いて、劇場へまいりました。その前にお稽古もしてくださり、私がまだなにもわからないときでしたが、いつか舞台でやるときまで、体で覚えておきなさいと教えてくださったんだと思います。一ヶ月、毎日聴かせていただいて、本当に勉強になりました。今回KAATで初めて語らせていただくのが、その「市若丸初陣の段」であることに、深いご縁を感じます。



【写真】十九五〇年「竹本駒之助命名披露興行」
淡路島・市村劇場にて

駒之助師匠の語る「和田合戦女舞鶴」の聴きどころについては、「記者懇親会レポート」をご覧ください。

十代豊竹若大夫師匠、四代竹本越路大夫師匠のもとでの修行、春駒師匠と一緒に「お嫁入り」や、これからの世代に伝えたいことなど、お話はまだまだ続きます。続編でご紹介していきます。